

## 特別な二月

園長 横尾 尚子

今年の二月は得した気分。4年に1度、29日までである“閏(うるう)年”ですから。閏という漢字は、王が門の中に居ることを表す文字で、中国では暦から1日はみ出すこの日(この月)には、王が門の中に閉じこもり、政務を執らなかつたことに由来するとも伝えられています。ではどうして、4年に1度、1日はみ出す日ができてしまうのでしょうか。

地球は、365日と約6時間(365日5時間48分45秒強)で太陽を一周していて、1年365日の暦では季節との間に徐々にズレが生じることになります。そこで、この6時間を4倍した24時間、つまり1日を4年に1度増やすことで、暦と季節とのズレを修正しているのだそうです。その修正年が閏年。現在各国で使用されているグレゴリオ暦(1582年制定)では、この閏年について次の3つの規則が作られました。①西暦年が4で割り切れる年は閏年。②ただし100で割り切れる年は平年。③ただし400で割り切れる年は閏年。それに従って400年間に97回の閏年を設けると、400年間における平均1暦年は、 $(365+97) \div 400 = 365.2425$ 日(365日5時間49分12秒)となり、暦と季節とのズレは、わずかに約3320年で1日となるそうです。430年以上も前の学者達の英知が、今も時の流れを制御しているのですね。

さて、閏年と言えば、夏季オリンピック。近代オリンピックの夏季大会は4年に1度、4で割り切れる年に開催されていて、それが閏年と重なることから、閏年はオリンピックイヤーとも呼ばれています。しかし、すべてが閏年だったわけではありません。1900年の第2回パリオリンピックは、上述の②と③の適応で、100で割り切れて400で割り切れない年のため平年でした。今年の開催地はブラジルのリオデジャネイロです。第31回を迎えて初めて、南アメリカ大陸での開催となりました。8月5日～21日の17日間、テレビから目が離せない日々がまたやってきます。そして、4年後の2020年は2回目の東京オリンピック。1964年の東京オリンピックでは、日本の戦後復興を世界に印象づけ、日本経済の動脈となる重要なインフラ整備が促され、国民のスポーツに対する関心が高まると共にスポーツ振興の制度整備が進みました。今回の東京オリンピックは、日本の未来に何をもたらしてくれるのでしょうか。楽しみです。今はただ、種々のゴタゴタが早々に解消され、世界最高峰のスポーツの祭典が平和裏に開催されるよう、祈らずにはられません。

椋山女学園にとっての夏季オリンピックは、やはり前畑秀子さんの金メダルでしょうか。戦前の1936年、ナチス体制下のドイツ：ベルリンオリンピック200m平泳ぎで、前畑秀子さんは地元ドイツ選手とのデットヒートの末、みごとに日本人女性初の金メダリストとなりました。椋山歴史文化館で、昨年5月29日まで8ヶ月間にわたって開催された「前畑秀子生誕百年展」では、その栄光までの険しい道のりと、それを物心両面から支え・応援し続けた学園の歴史が、豊富な資料と取材をもとに、余すことなく伝えられていました。それに続いて出された「歴史文化館ニュース第13号」の杉浦昭義氏(前畑さん甥)の寄稿文の一節が、今も心に残っています。「『一に努力、二に努力、三に努力』は叔母のモットーであった。」それは、世界のひのき舞台を目指す全てのアスリートに共通しているのではないのでしょうか。いつの時代も、いずれの瞬間も、アスリートは自己の限界と向かい合い、それを乗り越えるべくひたすら努力し続けている。それゆえに、観る者は感動し、生きる元気をもらう。私も、私にできることを精一杯頑張ろう！と。

残り2ヶ月。二度ともどらない一日一時が、子ども達にとって幸せな時間であるように、私は、私にできることを精一杯頑張ろうと思います。努力は、あまり得意ではありませんが…。